

MY OPINION

—明日の薬剤師へ—

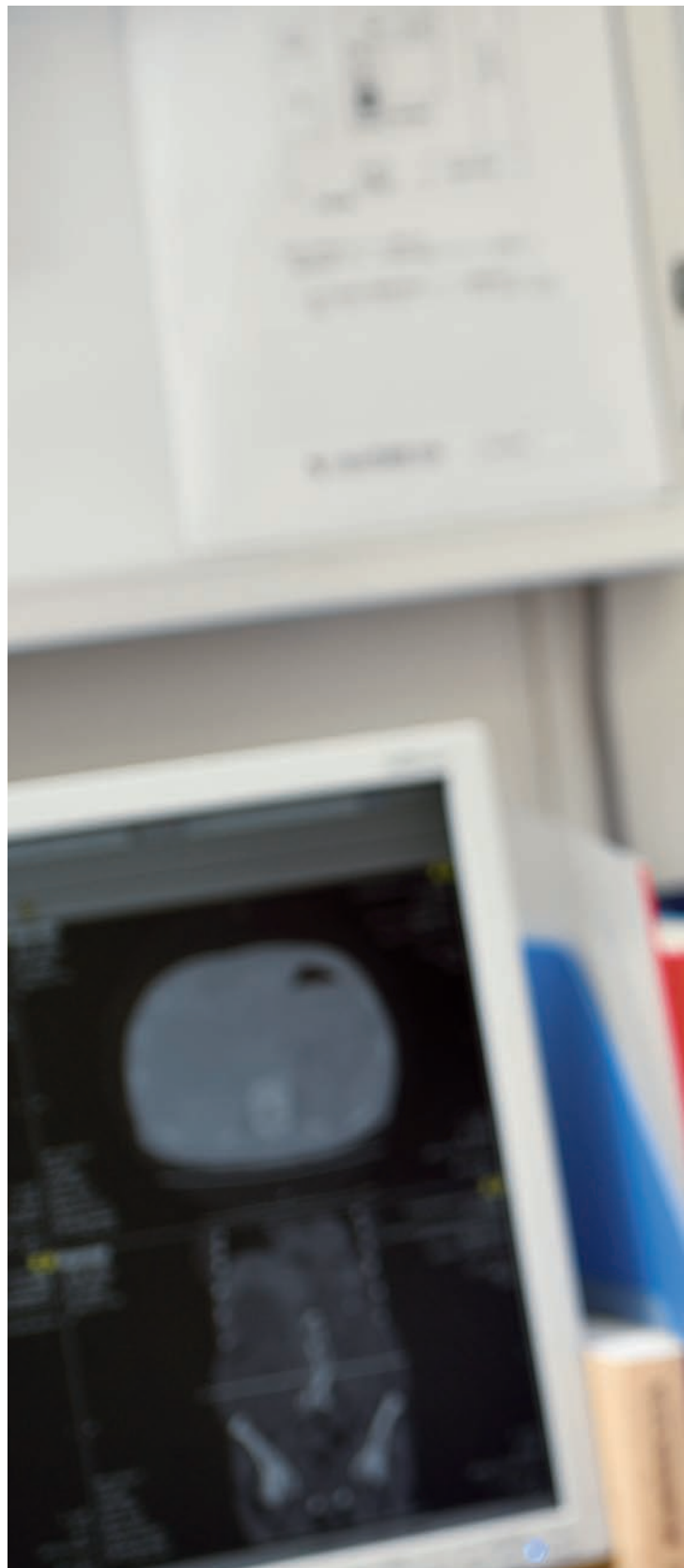


構成／武田 宏
文／清水 洋一
撮影／木内 博

学会はもう、
医師だけのものではない。
実臨床で起こったことを
薬剤師とともに学ぶ場所。

国家公務員共済組合連合会虎の門病院分院
腎センター内科部長／リウマチ膠原病科部長

乳原 善文



「もつとも困っている病気や病態こそ、 我々で克服しよう」とのスピリッツ。

国家公務員共済組合連合会虎の門病院分院（以下、虎の門病院分院）は、1966年に虎の門病院の慢性疾患治療センターとして神奈川県川崎市に開設された。日本で初めて透析専用の部屋を設け、「外来透析」の概念を生み出した医療機関だ。同院はまた、日本の腎疾患医療の牽引者として腎外病変、腎疾患を併発した他領域疾患の治療にも力を注いできた。

リウマチもそのひとつで、2001年に開設されたリウマチ膠原病科は腎センター内科と同じスタッフで兼務する体制をとり、他の医療機関にはできない細やかな対応で多くの患者を救っている。乳原善文氏は、常染色体優性多発性嚢胞腎（ADPKD）の腎動脈塞栓術開発者として知られた腎臓内科医であり、リウマチ専門医。2008年から両科兼務の部長を務めている。

「分院も含め虎の門病院では、リウマチ以外の膠原病は伝統的に腎臓内科医の領域でした。リウマチ科やリウマチ膠原病科といった診療科が確立するはるか以前の役割分担ですので、私たちにとっては腎臓の専門科がリウマチを診るのは当然の体制と言えます。

特に、腎不全を併発したりリウマチ患者は診療科の境界線上で行き場をなくしがちですので、そういった患者さんを積極的に受け入れるためにもこの体制が必要でした。

また、当院には『もつとも困っている病気や病態こそ、我々で克服しよう』とのスピリッツがあり、他の医療機関が苦手とする腎機能に問題のあるリウマチ患者を多く受け入れてきた長い歴史があります」

乳原氏が触れる「診療科の境界線上」では、リウマチ専門医は透析を必要とするような患者を敬遠し、腎臓専門医はリウマチの知識が足りないという状況が発生する。そこで、同院のスピリッツが発揮されているのだ。

「たとえば、透析及び腎不全をお持ちのリウマチ患者を診察できる点が当院の大きな特徴です。

私たちは腎臓病の教科書にもリウマチの教科書にも書かれていなかった境界領域の症例における治療法について、臨床の中で問題点を見出し、自力で方針、戦略を編み出してきました。長期透析によるアミロイドシスから引き起こされる骨・関節合併症や、リウマチによりCRP（C反応性タンパク）が高くなった患者さんが、動脈硬化から腎不全を進行させる病態への対応などがそれにあたります」

◆
乳原氏は現在、週に4回の外来を担当し1日に約50名の患者を診察しているが、うち約3分の1がリウマチ患者。

治療方法を「変える勇氣」を持ち、 患者からの電話を断らない。

【資料】過去5年間の本院と分院を合わせた診療実績

(※嚢胞腎関連の診療は主として分院で行っている)

■入院患者数

年度	2009	2010	2011	2012	2013
糖尿病性腎症	170	205	261	271	303
膠原病	317	314	374	452	457
対外循環患者	951	917	895	911	942
嚢胞腎・肝	647	592	593	589	658

■血液浄化療法の治療内容と件数

年度	2009	2010	2011	2012	2013
血液透析件数	40,590	39,559	40,141	40,012	40,270
入院患者透析室透析件数	11,062	11,546	12,474	11,918	12,273
入院患者病棟透析件数	302	414	595	748	658
CAPD外来件数	414	326	272	278	284
特殊体外循環件数	261	307	291	225	324
新規導入件数	88	97	101	97	109

■リウマチ膠原病科診療実績

透析中及び腎不全を持つリウマチ膠原病の診療は他の施設にない特徴

外来患者：約1,000名／月

入院患者：65名／日

生物学的製剤使用：約300名（過去2年間）

全身性エリテマトーデス診療中の患者：約200名

関節リウマチ患者：600名

驚かされるのは、在院時、乳原氏はPHSに入ってきた患者からの電話に必ず自ら対応することだ。「私は、リウマチは慢性疾患だが『急を要する』疾患だと認識しています。見逃したり、待たせて対応に遅れを生じさせ、患者さんを不幸にしてはなりません。ですから、電話には必ず出ます。」

そういったスピード感は、治療法や処方の変更についても言えます。リウマチは早期診断、早期治療が重要と言われるようになっていますが、私はそれらに加え、効果が見られなかった際の治療法や、処方の変更に対しても素早い判断が必要だと思っています。現在の選択にこだわらず、

『変える勇氣』を持って、より良い選択を探していくべきでしょう」

リウマチ医療は、2000年代に生物学的製剤の処方開始されて以降、劇的な変化を遂げた。それまで、人工関節などの整形外科的な対応以外にめぼしい治療法がなかったものが、内科的治療によって寛解まで望めるようになったのだ。

ただ、生物学的製剤には高い副作用リスクもあり、高度

それでも毅然と質問する気概。 服薬指導の要点を判断できる臨床力。

な薬物療法のノウハウが求められる。つまり、薬剤師の担う役割が、きわめて大きな医療分野になっていった。

「現代のリウマチ専門医にとって、薬剤師は欠かすことのできないチーム医療のパートナーです。医薬品情報、処方チェック、服薬指導など、さまざまな局面で心から頼りにしています」

虎の門病院分院では、診療科と薬剤部が密な連携をとっている。乳原氏のもとにも、疑義照会などの内線が薬剤部から入る。

「サイクルの生物学的製剤投与日が休日当たるなどの細やかな指摘も含め、処方時に私が見落としした点をしっかりと正してくれます。医療が人の成す行為である限り、必ず誤りは起きます。誤りを相互に指摘し合える仲間がいてこそ、事故を回避し、国民からの期待に応えられるのだと考えています」

同院では、処方せんを受け入れた保険薬局からの問い合わせは担当医師には直接入らず、薬剤部が受ける。薬剤部でも答えられない内容に限り、疑義照会として担当医師に問い合わせが入る。

「非常勤で他院の外來を担当した経験を思い返すと、保険薬局からの問い合わせがすべて直接、医師に入る体制が一般的なようです。それに比すれば、当院のこの体制はと

ても理にかなっており、すばらしいものだと思います。

有り体に言えば、外來診察時、目の前の患者さんの電子カルテを開いている際に、他の患者さんに関する問い合わせは受けたくありません。患者情報の混同が起こり、どちらかのカルテに間違った内容を記入してしまうかもしれないからです」

保険薬局からの疑義照会の電話に不機嫌な対応をする医師。その剣幕に、恐れをなす薬剤師。不幸な構図は、何も医師の不遜だけに起因するものではないようだ。

「それでも必要な質問は毅然とする。そういった気概は絶対に失ってほしくありませんが、電話の向こうの医師が今どんな状況にあるかのイメージを持ち、配慮の言葉がさし挟まるだけでコミュニケーションはスムーズになるように思います」

また、服薬指導の些細な相談、たとえば、薬剤を服用するのが食前なのか食後なのかの確認などは、薬剤師のスキルで対応できることも多いはずです。指導の実際として食前か食後かよりも、1日3回に力点を置いた言葉を示すほうがこの患者さんには大切だと思えば、そうしてくれてかまいません。

逆に言えば、そういった感触は患者さんを目の前にしている薬剤師にしかわからないでしょう。払い出しの場で、

リウマチの最先端の薬剤の知識を得て 医師の良きパートナーに。



PROFILE

うばら・よしふみ

1985年 大阪市立大学医学部卒業

1985年 虎の門病院内科研修医

1990年 虎の門病院腎センター内科医員

2001年 虎の門病院腎センター内科・リウマチ膠原病科医長

2008年 虎の門病院腎センター（分院担当）部長

リウマチ膠原病科部長（本院分院）兼任

瞬時にそういった判断をくだせる臨床力を養う努力を怠らずにいていただきたいと感じます」



高い効果と高いリスクを具有する薬剤が活躍する分野での、医師と薬剤師の協働のあり方について。

「理想を念頭に置けば、いまだに動きが別になってしまっている印象が拭えません。」

たとえば、日本リウマチ学会への薬剤師の出席者が少ない点が挙げられます。学会は、最新の治療効果や副作用情報が発表される場所でもあるのですから、ここに足を運び最先端の医薬品情報を得ようとする薬剤師がもっと増えたいと思います。

学会はもう、医師だけのものではありません。実臨床で起こったことをともに学ぶ場所なのです。どんな発表があるかは、事前に抄録を見ればすぐにわかります。知りたい情報にはピンポイントでアクセスできるので、もっと学会に目を向けてもらいたいですね」

乳原氏は、「梶ヶ谷腎・膠原病研究会」と称した研究会を主催している。ここも、将来的には医師と薬剤師がともに学ぶ場になってほしいとの願いがある。

「働き盛りの若手、中堅医師は、学会に参加する時間的余裕が乏しい。ならば、学会をこちらに招へいしようという着想で、月に一度、各分野の権威に講義をお願いする院内の勉強会です。スタートから足かけ6年がたち、開催数は延べ70回を超えました。この会の門戸は院外にも開いており、近隣の開業医の先生方も多く参加してくれています。ちなみに、『梶ヶ谷』とは、当院が所在する地名です。」

興味のある分野がテーマの際、薬剤部の薬剤師が参加してくれていますので、今後は近隣の保険薬局の薬剤師にも広報して参加を募るべきかと考えています」

最後に薬剤師に向けたエールを贈ってくれた。

「医療が今後、健全に発展するうえで、医師と薬剤師の協働は、なくてはならないファクターです。医師にも申す勇気を持ってもらいたい。その裏づけとして、これまで以上に学んでもらいたい。私から薬剤師の皆さんへのメッセージは、この言葉に尽きます」